

●「戦雲」予想を超える人ら観る秋の行事の重なる中を

梅津純子

「戦雲」(タイトル)が何かということ、一連からそれがしれるのがこの歌。「軍事基地化と島民の姿 沖繩は今」という見出しで県内自主上映の案内を購読中の新聞でたまたま読んだ。ドキュメンタリー映画。一連の終り、作者みずから前売りにうごいたことも歌からしれる。

心優しき人と恃みて自が心励まして訪ふ前売りの日々

監督の三上智恵の著作として、『戦雲 要塞化する沖繩、島々の記録』(集英社新書)が昨年一月刊で出ている。

「戦雲」は、本作に出演している山里節子(語り)が石垣島の即興の叙情詩「とうばらーま」にのせて歌った「また戦雲が湧き出してくるよ、恐ろしくて眠れない」という歌詞から取っている、という。石垣島の発音で「いくさふむ」。

「戦雲また湧き出るよ」ミサイルの基地に抗ふ老女の唄声

一連には、牛飼ふ男(与那国島)、山羊飼ふ女(宮古島)、海人おぢい、など人が多く出てくる。いくらかは感覚として入っていたつもりだったが、ハツとした歌に、

「私らは〈多少の犠牲〉に入ってるね」子らと山羊飼ふ女の抵抗

辺野古の老、それに「四十年余若かりし友の髪も白みぬ」を含めて目撃者として、また同行者として記録する歌々。島にいない、いたことがない者にとくにひびくものがある。

●三月にわれは卒寿を祝はれる 四日後義兄は黄泉へ旅立つ

河村郁子

ライフイベントでもある卒寿。同時に義兄の死。それがほぼ一時に起ったこと、回想のなかの一大事である。義兄の姿は、これまでも作者の生活のなかにしばしば登場してきた。タイトル「わが令和六年回想」。

七月に亡母の三十三回忌うから揃ひて仏事落着

仏事落着、の意味。三十三回忌は「弔い上げ」とも呼ばれ、以降年忌法要は行われないという理解がある。

このあとの「保身ファースト」(五首目)までがじしん、また身近な事柄になる。そのあとは地球温暖化、人類、原子力また被団協と地球規模、大きな事柄になる。いずれもいかにも作者らしい真率なメッセージだ。

被団協ノーベル平和賞受賞 地上くまなく警鐘ひびけ

●水曜日ふははと雪降りてをり初参加となるヨーガ教室

布宮慈子

週一でおこなわれている教室（十首目）。週一が、出だしの「水曜日」か。この歌、雪の降り方にも少し気分のようなのがみえている。次のこの歌とセットで読めるよう。

気持ちよく伸ばす首筋ゆつくりと回してゆけば雪の空見ゆ

この歌には伸ばす首筋、が、ほかの歌には背中が伸びてゆく、がある。いずれもポーズに関係するようだ。

一連タイトルは「ヨーガ教室」。

発端はギックリ腰をやったこと（寝ねられぬ夜を過ぎしことあり）。何かせむ、ヨガの教室あるとふ、スポーツ振興係（役場）あり体験参加を即申し込む、などここまでが前段になる。その体験の様子もいきいきとしたものになった。

ヨーガとはただの体操ではなかつた一つひとつの余韻を味はふ

そうしてそれが生活の一部になる。歌はそれぞれにキビキビとした運び、リズムカルだ。

週一のヨーガ教室通ふため今朝は車の雪を下ろしつ

前号作品短評B 〈慈子〉

●糸魚川そういう川はないという呼び出してよむ駅の案内に

小野澤繁雄

調べてみるとやはり、糸魚川市には「糸魚川」という名前の川はないのだそう。糸魚川市は新潟県の最西端に位置する市で、県庁所在地の新潟市より富山県富山市のほうがだんぜん近い。作者も駅の案内で知って、そうなのか？と思ったのだろう。「呼びだしてよむ」は、スマホなどで糸魚川を検索して読んでみた、と解釈した。

のり鉄の旅ともいえぬ旅ながら展望台に海をみており

一般的には「乗り鉄」だろうが、動詞を平仮名にすることが多い作者の表記だから「のり鉄」。のり鉄は、ひたすら列車に乗って車窓や列車の音などを楽しむ鉄道ファンのことだが、その楽しみ方は多種多様だという。また、鉄道車両の撮影を行う「撮り鉄」、発車メロディーや駅や列車の自動放送、列車の走行音を録音して個人で楽しむ「音鉄」「録り鉄」、さらに「模型鉄」、最近増えている「女子鉄」もあるらしい。

先ごろ筆者は以下のものに出合った。新庄駅で時間があり、構内から続く場所を歩いていくと「ゆめりあ鉄道ギャラリー」というスペースがあった。時間つぶしのつもりだったが、思いがけず鉄道ジオラマなどを楽しむことができたのだった。

「塩送る」舞台となれどそのみちの起点のまちに下車をしたもの

越後の武将上杉謙信が敵將武田信玄の領国甲斐・信濃に塩を送ったという話は、戦国の世の美談として知られている。塩の道の起点が糸魚川であり、千国街道（松本街道）は軍事的にも重要視され、「敵に塩を送る」の諺の由来となっているとのことだ。

●身支度は白一色に帰り花

新野祐子

題名は「餅つくる」で、一連の二句目。「帰り花」は冬の季語。初冬の小春日和に咲く季節はずれの花のことで、返り咲きの花をいう。商品としての餅をつくるため、みなが白い作業着に着替えたことを洒落て表現したのだろう。

一粒一粒艱難越えて今年米

米の一粒一粒はただ黙っていてできたのではなく、手塩に掛けて育てられ、ことし一年の災難や困難を越えて実ったものだ。その米の尊さを讃えていて、読者も思わず居住まいを正すような句である。

湯気に頬かがよう冬の漢たち

餅をつくる過程で湯気が上がると、漢^{かどこ}らの顔が光って見えた。美しく、神々しい感じさえる瞬間だ。次は、懐かしさを覚えるような一句。ほんとうは餅搗き唄というのが正しいが、それを知らない自分たちはフォークソングが出てくるんだ、という。休憩中の一コマであろうか。

餅搗き唄あるらし我ら青春フォーク